

東北学院創立百二十五周年記念式

建学の精神を礎として東北復興の道のりを共に

東北学院は大震災の試練の中で創立百二十五周年を迎え、五月十四日、感謝祈祷会、記念式典ならびに校祖墓前礼拝が執り行われた。土樋キャンパスのラーハウザー記念礼拝堂が現在震災による復旧作業中のため、感謝祈祷会は同キャンパス8号館第一会議室、記念式典は六〇一番教室が会場となった。

(本文)

闇を照らす希望の光に

式典に先立って行われた感謝祈祷会には教職員や〇〇〇が列席。初めに震災の犠牲となった本学院の学生生徒六名、行方不明者一名をはじめとする多くの尊い命に黙祷を捧げた。

平河内健治理事長は奨励の中で、「人々が深い悲しみの中で闘っている。神は私たちが闇を照らす希望の光となってこの試練に立ち向かい、復興の使命を全うできるよう導いてくれる。その命を今日も与えられ、この場にいることを感謝する」と述べた。

続いて、原田浩司総合人文学科助教、日野哲総務部部長、倉松功前学院院長が、今日までの導きに感謝し、苦難の中にいる人々に豊かな慰めがあるようにと祈りを捧げた。

建学の精神が試される時

午前十時から行われた創立記念式には、教職員や中学、高校生、同窓生など約〇〇〇人が参列した。

平河内理事長は式辞で、第二次世界大戦後の本学院復興のシンボルであるシュネーダー記念図書館の玄関正面に掲げられ

た「主を畏れることは知恵の初め」（旧約聖書「箴言」第一章七節）の一節に触れ、「私たちにはこの苦難の中で、神を畏れ敬いながら、斬新な安心・安全を保証する科学技術と新しい幸福思想ともいえる哲学を創造する知恵を働かす試練と課題が与えられている」と説いた。

そして、「神の愛によって与えられたかけがえのない「命」(LIFE)を信じ、大切にし、闇を照らす希望の「光」(LIGHT)を輝かし、思いやりと愛(LOVE)をもって、日本と東北の復興に取り組んでいく。本学院に連なる者すべてが、建学の精神である「地の塩」「世の光」として奉仕のできる人になることを祈念する」と述べた。

続いて、永年勤続（二十五年）表彰が行われ、十六人の職員一人ひとりに平河内理事長から表彰状と記念品が授与された。

その後北山霊園（青葉区）において、本学院創立者である押川方義、W・E ホーイ、D・B シュネーダーの校祖墓前礼拝が行われ、仙台南伝導所の平賀真理子伝道師による「神への信頼の下に」と題する説教が行われた。

百二十五周年記念事業は次の通り実施する。

- （一）初代院長・押川方義に関する調査・研究と報告書の作成（「図録『押川方儀』」は新年度に発行予定）
- （二）東北学院フェスティバル（仮称）の開催（十一月頃開催予定）東北学院の学生、生徒及び園児による演奏会など
- （三）民族研究の成果公開「民族資料の展示と民族歌舞の集い」（十月頃開催予定）